

聖家族 A年

第一朗読 シラ 3・2-6、12-14
第二朗読 コロサイ 3・12-21
福音朗読 マタイ 2・13-15、19-23

2025.12.28 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、^{おきなご}幼子イエス様、そしてヨセフ様とマリア様と、聖家族の人たちと
言われる家族がエジプトに行くっていう、そういうところが朗読されたわけですが、
も、聖書の中で「エジプト」というのは象徴的な意味を持っています。現代の、今の
エジプトの国の人にはいつも本当に申し訳ないんですけども、ネガティブな意味で
す。「エジプト」って言ったときには、死の国、あるいは本来人がそこに居てはいけな
い場所、そういうような意味をいつも持ちます。

だから、今日の朗読の中で、聖家族が、幼子イエス様が、エジプトに行ったって
いうのは、イエス様のお生まれになったときのお話そのものが、これから福音書が語ろ
うとする大人になってからのイエス様ご自身の活動を全部象徴している、そういう物
語ですから、イエス様ご自身が、本来居る場所ではない所に居る人たち——社会から
弾き出された人だったり、あるいは神様から離れて罪の中にいる者たち——そういう
人たちの所に自分の方から行って、そしてやがてその人たちを連れて神様のもとに、
本来居る場所——本来居る場所が聖書の用語で言えば「イスラエルの地」、あるいは
「エルサレム」いうことになるわけですが——そこに連れて行く。神と共にいる。
そして人間を本来の状態へと連れ帰るっていうことを暗示している、そういう動きに
なるわけです。

もう少し今日のこのお話そのものの背景に焦点を当てて考えるならば、幼子イエス
様を連れてヨセフとマリアがエジプトに行かなければならなかったのは、エルサレム
そのものにいたら命を狙われてしまうからということですね。ヘロデ王が、お生まれ
になった幼子が自分を脅やかす存在かもしれないと恐れて抹殺しようとするので、エ

ジプトに逃れた。つまりは、本来の居る場所であるはずのイスラエルの地では生きていけないから、エジプトに逃れたと、そういうような展開になっているんですね。

このようなこの背景をもってこの「聖家族のエジプト行き」の聖書の箇所を読むたびにわたしが思い出すのは、ずっと前ですけども、いろんな方々を支援するための講座、その講義で、薬物依存の方々の回復に同伴している、そういうことに携わってる方のお話を聞いたときです。薬物依存っていうのは、違法薬物。もちろんそれは法律に反していることですので、犯罪なんです。けど「あなたのやっтерことが犯罪だから」とか、そういうようなアプローチでその依存の中にいる人に関わっても、その心は通じ合わないし、なかなか支援にはつがらない。

でも、どんな人でもその薬物依存ということになるにあたっては、それまでの生活が、自分の人生が、その人にとって耐え難い、ある意味で生きることができないと感じられる——直接意識してか無意識かに関わらずですけども——そういう中であって、その時に自分が生き続けるための一つの緊急避難的な方策として自分が見出しそして取った緊急的な生存戦略が違法薬物に依存するということだったんだ、というふうに見るならば、「その時のあなたにとって、生き続けるためにそれは必要なものだったんでしょう。けどいつまでもそこに留まる必要はないし、留まってはならないんだ」っていう感じで、その時にはあなたにとって必要なことだったということは——だからと言ってその犯罪を肯定してるとかそういうことではないんですよ——でもそのことには理由があって必要だったんだ、と。けどいつまでもそこに留まることはできないし、留まる必要はないんですよっていう中で、少しずつ一緒に歩いていくっていうようなお話を聞いたことあるんです。

それは必ずしも薬物依存っていう特定のものに限らず、いろんな形で自分を傷つけてしまうことだったり、他の犯罪行為であったり、あるいはもっとわたしたちみんなが体験していること、子どもから大人になっていくにあたって、それぞれ、世の中が自分の思い通りにならないんだっていう現実直面していく。そこにおいて、子どもながらにそういう耐えがたい現実を乗り越えてそこで生き続けるために、人はそれぞれたとえば思い通りならないときに怒るとか絶望するとか、あるいは恨むとか、そう

というような感情の動きを通してなんとかその思い通りにならない辛い現実の中で生き続けようとするっていう方策を取るということがあるわけです。

それは、ある意味で、聖書が言うところの「エジプト」と象徴的に表現することができます。「エルサレム」、本来の場所にいたら生きられないから、「エジプト」に一時的に逃れる。だけど「エジプト」はいつまでも居る場所ではないんだ。ずっと居るならば、そこが死の世界だから、そこで奴隷になってしまうから、そこで生きられない。だからいつか戻っていかなきゃいけないというわけです。イエス様を連れてエジプトに逃れてそこで平和に暮らしました。めでたし、めでたし、じゃない。「イスラエルに戻りなさい」って天使のお告げがあって、戻っていくわけなんです。でもそれは必ずしも簡単な歩みではない。

わたしたちもある意味で、子どものころに取った、思い通りにならない現実に対して怒るとか絶望するとか、それはその時に必要だった感情の、心の持ち方でありましたけども、大人になりながら、そして信仰を持って、その辛い現実を生き抜くためにそれだけが方策ではないのだ、違う道を取ることができるということに出合いながら、だんだんに自分自身になっていくし、あるいはもっと重大なことから回復していく。その道を歩むわけです。

それは他の人の助けもあるんだけど、でも今日のこの聖家族がエルサレムまで戻らなくて、最後ナザレ、あと、ナザレからはイエス様ご自身の旅っていうことで福音書のお話が続いていくように、他の人の助けのうちに、しかし最終的には神様の支えで、一人ひとりが自分の人生を——それは十字架の死と復活——古い自分に死にそして新たにされていくっていう道を意識的に選択するということを通して実現するんだっていうことを、イエス様が前もって、わたしたちと共にある方が先にそれを示して、そしてそこに絶えずご自分が一緒にいることを思い起こさせてくれているというのが、今日の「エジプト行き」であり、そして「エジプトからの帰還」で、そしてその後のイエス様ご自身の公生活とすることができると思うんです。

わたしたちがそれぞれ自分の人生は最終的には神様と自分で担う。でありながらも、でもそれが、「あなたの問題だから」って互いに無関心である、あるいは「エジプトに下っていく」っていうふさわしくない態度や行動を取るということだけを切り取っ

て、「もうエジプトに行ったんだから、もうエジプトで死ね」みたいな、お互いを裁き合う、そういうようなことではなくて、それも含めて、でも共に一緒に旅をする。そして、その旅の中で一人ひとりが本当に自分自身の中に共にいてくださる神様、イエス様に出会っていくならば、まさにそれこそが恵みへの入口ということになるわけですが、聖家族も、特にヨセフ様は、「もう、だからあの時に離縁しようとしたのに。こんなことに巻き込まれて」とは言わないんです。「自分には関係ないんだ」って言わない。いつも一緒に行くっていう、そういう道を取るというのが、まさに神様がお造りになろうとしている家族——それはいわゆる血縁の核家族だけではなくて、神の家族——のあり方だし、社会がそのようなものに少しずつでもなったらいいなっていう、その源動力として教会をお建てになったと思います。

わたしたち自身が、それぞれ自分自身も心の「エジプト」からの帰還を、教会、他の人との支え、またイエス様ご自身の導きによって歩んでいる者としてお互い同士が、そういう一時的に本当にふさしくないことかもしれないけど、でもそれはその人がその時に生き残るために必要だったんだというので、改めて、でもいつまでもそこに留まらないでいようっていう、いろんな罪とか悪の、あるいはその自分自身を傷つけてしまうようないろいろな考え方や行為から、やがて本来の神と共にある場に戻っていくことができますように、支え合うならばそれこそが恵みだし、神様が助けてくださると希望しています。

わたしたちが今日、それぞれこの社会がそして教会が聖家族にならないながら互いに支え合う——排除して裁き合う者ではなくて、支え合う者と変えられていく恵みを互いに願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>